

「忍び(Shinobi)」から「忍者(Ninja)」へ —立川文庫『猿飛佐助』を中心に—

吉丸雄哉

「忍び(Shinobi)」は、日本の14世紀から17世紀前半に、平時の諜報活動、戦争時の偵察・破壊活動で活躍した者たちです。伊賀・甲賀の出身者が多く、伊賀者・甲賀者が有名でした。平和な江戸時代に入り、「忍び」は大名に抱えられ存在しつづけるものの、その活動は一般の人々の目にほとんど触れなくなります。

しかし、かえって想像力が刺激されるのか、超人的な忍術を身につけた「忍者(Ninja)」(本発表ではフィクションにおける「忍び」を「忍者(Ninja)」と呼ぶことにします)が小説や演劇によく見られるようになりました。

小説や演劇での「忍者」の話は、「1忍術をつかって大事なものを盗んで戻ってくる」あるいは「2忍術をつかってお家の乗っ取りや天下転覆をはかる」ものが多いです。史実のとおり軍組織での「忍び」の活動(情報収集・偵察・破壊)を行う「忍者」の話は前の2つよりも少ないです。

有名な「忍者」に猿飛佐助がいます。最近の研究により、猿飛佐助は『厭蝕太平楽記(Ensyokutaiheirakki)』という18世紀後半に書かれた小説に始めて登場することがわかりました。以後、猿飛佐助は大坂の陣を描いた軍記小説や講談によく登場するようになります。

猿飛佐助の名前を有名にしたのが大正期(1910年代)に大阪で刊行された立川文庫(たつかわぶんこ)です。1913年の立川文庫40編『猿飛佐助』はそれまでの忍者像を一変させる内容でした。

甲賀流忍術名人戸沢白雲斎に見出されて忍術を習い、その後真田幸村の家臣となって、忍術をつかって活躍します。それまでの忍者は怪しい忍術を用いる闇の存在として通常描かれました。ところが、立川文庫での猿飛佐助は、主君に強い忠誠心を持ち、主君真田幸村のために精一杯働きます。また山賊など悪

人は懲らしめ、困っている人を助けます。正義のヒーローとしての忍者は猿飛佐助が始めてで、これ以降、正義のヒーローとしての忍者が小説や演劇・映画に登場するようになります。

猿飛佐助の人物造形には『西遊記』の孫悟空の影響が強いと言われています。それ以上に、猿飛佐助が武士でありながら忍術をつかう人物と設定されていることが大きな特徴だと思います。武士を主人公にした立川文庫のその他の作品に準じた設定なのでしょう。家への「忠」、仲間との「義」を主題に据えた立川文庫は、商人や職人の家に住み込みで働く十代の丁稚たちに受け入れられました。立川文庫は1924年でその刊行が止まりますが、猿飛佐助はその後いろいろな小説・漫画・映画・ゲームに登場し、今日でも最も有名な忍者の一人になっています。



“Lecture & Performance” in
ロンドン、アリカンテ、パレンシア、バルセロナ、マドリード、ローマ、2014年11月

The truth of Ninja

Common and different points between 忍び(Shinobi) as a historical fact and 忍者(Ninja) as a cultural phenomenon

三重大学人文学部の忍者文化研究について

忍者の聖地である伊賀市の市役所や商工会議所、観光協会等と協力して忍者の研究を行っています。

1. これまで非公開だった忍術書の調査に基づく、日本の歴史の事実としての忍者(正確には忍び)の研究
2. 日本の文芸や演劇が生み出した忍者像の研究。世界のアニメや映画のなかの忍者像の研究。
3. 自然科学の研究者や学部と連携した、忍び・忍者の身体と能力の科学的分析。忍術書に書かれた忍者の知恵の学際的研究。

さらに忍者を知るには

●「忍者文芸研究読本」(笠間書店、2013年):日本の歴史なかでの「忍び」と、日本の文芸のなかでの「忍者」の誕生についての日本で最初の学問的文献です。

http://kasamashoin.jp/2014/04/post_2888.html

http://kasamashoin.jp/shoten/ninja_set.pdf

●「伊賀連携フィールド忍者文化協議会」:忍者に関する文献、アニメ、映画についてすべての情報を収集し、データベースを作成しています。さらに、毎月一度、忍者に関する講座を伊賀市で開き、忍術書の翻刻を行っています。

<http://www.human.mie-u.ac.jp/kenkyu/ken-prj/iga/>

私たちの成果の英語(電子書籍)での公表も行っています。



伊賀市について

伊賀市は、京都、大阪、名古屋、伊勢神宮の中間地点にあり、戦国時代(16世紀)には、日本で軍事的に最も重要な場所のひとつでした。こうした伊賀の土地で、忍者が生まれました。伊賀市にある伊賀流忍者博物館(Ninja Museum of IGA ryu)は忍者について資料を収集し、忍者についての展示や忍者ショーを行っています。

<http://www.iganinja.jp/> (in Japanese & English)

<http://www.ninja-museum.com/> (in Japanese & English)

さらに伊賀市について知るには、以下のサイトを訪問してください。

<http://tourismmiejapan.com/municipality/iga.html> (in English)

<http://tourismmiejapan.com/spanish/recommend/ninja.html> (in Spanish)

<http://tourismmiejapan.com/italian/recommend/ninja.html> (in Italian)

<http://igakanko.net/> (in Japanese)

<http://www.igaueno.net/> (in Japanese)



忍者の身体と心

川上 仁一

忍者(Ninja)は、諸外国に於いても誰にも知られる存在です。日本文化の一つとして受取られています。誤解された忍者像が蔓延しているのも事実です。特に史料に基づく正しい歴史学的な解明や、忍者の真の術技・精神性等の探究は等閑にされ、殆どは正しく理解されていない状況となっています。

忍術は諜報・偵察・攪乱・謀略などの古典的軍用技術ですが、元来は自存自衛のための手段(総合生存技術)とも云えるものです。戦いを極力避け、自他共存する平和安定の「和」を構築する実践手法でもあります。世間で想像されているような、正邪を取混ぜた闇の戦士という訳では決してありません。

忍者として活動するには、敵を伺い謀略を廻らす明晰な頭脳と、様々な場での行動が可能な剛健で敏捷な身体は重要な要素です。そして何よりも必要なのが、如何なることにも耐え忍ぶ心と、私利私欲に惑わず大義を全うする正心(忍者としての正しい心)が不可欠の要件です。これ等は生来のものだけでなく、幼少より行なう過酷な心身の鍛錬により培われ、書物によって習得できるものでもありません。

古来の方法に従い、心身不二(精神と肉体の統合)の修行を通じて、知識と実践の術技を体得しながら、忍者の心も養っていくのです。厳しい修行によって能力の極限化を目指し、その過程に於いて忍者の心である、「忍耐」や「正心」「和の思想」が養われていきます。苦行(九業)とも云われる修行方法が定められており、継続して鍛錬を積み、常人を超える能力を身に付けることが可能とされます。しかし、超人的と思われる術技を駆使する忍者の身体も大切ですが、より以上に重要なのがこれ等の心なのです。

「忍」の字は、刃(刃物)の下に心(心臓)を置いた形であり、何事にも動じない鉄壁の不動心や残忍の意味合いが有ります。「しのび」と訓み、秘かに物事を行なうことや、堪えることを意味してもいます。また「仁」(にんしのぶ)の慈愛の意味合いも含んでおり、修行を通じて得る「忍」の一字に集約して表わされる心こそが、万物に感謝し共存する忍者の真髓と云えます。

忍者の身体と心は不可分です。日々に心身の修行を続け武備を怠らず、情報を得て戦いを避け、万物と和合していくことこそが忍者の本旨です。健全な心身により、何事にも耐え忍びながら正しい心を以て過ごし、慈愛の念で自然や人々と調和する者が真の忍者の姿と云えるでしょう。



忍び(Shinobi)の歴史

山田雄司

忍者は歴史的には「忍び」と呼ばれ、史料上確実に存在が確認できるのは、南北朝時代(1336-1392)以後です。また、乱波(らっぱ)・透波(すっぱ)・草(くさ)など、地方によりさまざまな名前で呼ばれていました。戦国大名はそれぞれ忍びを抱えていたことが確認でき、忍びは情報戦や実際の戦いにおいて先陣を切るなどの働きをしていました。忍びは、堀を渡り、城壁を越え、一番に敵城に侵入して破壊・放火・殺人などを行うなどの重要な働きを担っていました。

伊賀・甲賀地方は京都にほど近く、まわりを山という天然の要害に取り囲まれていることもあって、大名勢力が弱く、そのかわりに自治が発達し、一揆を形成して武装していました。そのため伊賀衆・甲賀衆と名乗って近隣諸国に傭兵として雇われて戦闘に加わることもありました。

伊賀・甲賀の自治は、織田信長軍によって壊滅的打撃が加えられますが、天正10年(1582)6月2日の本能寺の変後に、徳川家康が堺(大阪府)から伊賀・甲賀を越えて白子(三重県鈴鹿市)を経由して本拠地である岡崎(愛知県)に逃れる際、伊賀者・甲賀者が山中の護衛をしたほか、さまざまな戦いで家康の先陣を切っていました。そのため、江戸に幕府が樹立されると、家康にとりたてられて江戸城周辺に居住地を与えられ、城の警備をするようになったほか、諸大名が抱えることもありました。その一方、地元にとどまり、農民となる者もいました。

「忍び」が関わった最後の戦いは寛永14年(1637)の島原の乱であり、太平の世となって戦闘が行われなくなると、「忍び」の任務は他藩の情勢を探ったり、参勤交替の時の警護をしたりすることが主な仕事となりました。そして、このころ忍びの方法や心構えなどを記した忍術書がさまざま書かれることになりました。これは、兵法の中の一分野としての忍びから、忍びが独立した職能になったことを意味しているものと思われます。

そして、延宝4年(1676)に、「忍び」の間で伝えられてきた技も伝授されなくなってしまうという危機感から、中国古代の兵書『孫子』をはじめ、さまざまな兵法書・忍術書からまとめ上げた『萬川集海』が編纂されました。

江戸時代末の嘉永6年(1853)、ペリー率いる黒船が浦賀沖に来航した際に船内の探索を行ったのが忍びの最後の任務とされ、以降職能としての「忍び」は消滅することになりました。

